

風呂と絵本と物語

子どもが小さいとき、お風呂の時間が大変だったと聞かされます。母親が二人の子どもと一緒に入れて、交代で洗うことになるので、一人は必ず洗い場で待たされています。そんなとき、妹の方は、なにもすることがないので、お風呂用のおもちゃで遊び始めるのが順当なところだと思うのですが、そのご家庭では、妹の方が洗い場で何か、もにやもにや言い始めるというのです。聞き耳を立てると「もしもし、ビロリラちゃんですか。遊びに行ってもいいですか」と電話で話をしているようだったと言います。相手の子はビリビリーちゃんという架空の人物を二人立てて、物語が進行するようになっていたそうです。

男の子の場合は架空の人物が登場するものの、様子が変わっていて、レゴで作った車やボーネルンドの電車などのおもちゃを使ったり、空中に向かって「エイヤー」とこぶしをあげたりする、ごっこ遊びに発展していたそうです。

子どもにとってそうしたお風呂場で手持ち無沙汰でいる状態は、ジャブジャブと洗面器や手桶を使って水をかけて遊んだり、ゴムボールを投げ合ったりし、時に叱られるという始末になることが多いものですが、多くの場合は、架空の人物が登場し、近い物語を構成することが多いのかもしれません。

それにしても、聞いたことのない二人の人物。絵本に出てきそうもない名前です。大人には出てきそうもないと思います。おそらくは絵本で読んだような物語の構成があって、構成を作り直して空想の物語を語り始めるのだと思います。

時にもめ事を子どもの前では披瀝しないとか、大人は苦心していても、子どもは聞き耳を立てて大人の会話を聞いていると言われます。子どもにとっては全部頭に入る情報なのですから。情報を組み立ててつなげるのは得意なのでしょうか。

架空の物語が進行する創造力の培い方という点で注目されているのは、自然遊びです。前に触れた「僕たちがクモさんのところにお邪魔しているのだからね」と何気なく保育士さんが発した言葉のいくつかはやがて子どもたちの物語に登場するのかもしれないと思いました。

（松戸市 藤田 隆）



きのこ色は何のため？

花は花粉を運んでくれる昆虫や鳥に目立つ為、動物は捕食者から逃れるため、逆の立場では獲物に気付かれない為の保護色、隠蔽色、繁殖期に雌へのアピールなど色彩には何かの意味があると思います。

きのこの場合は下の写真のように赤白黄色紫緑黒など種類により色は様々です。人間にとっては識別の役には立ちますが、きのこにとって何の役に立つのか分かりません。赤いきのこ中に美味しいものもあれば有毒もあるので食毒の見分けにも役立ちません。風で運ばれる孢子にも種類ごとに異なった色があって識別の手がかりになるそうですが、それも何の役に立つのか分かりません。毒も自身を守るためには効くのが遅くて役立たずでしょう



タマゴタケ 食



ベニグチ 食



カエントケ 毒



シロオニタケ 毒



キヌガサタケ 食



ドクツルタケ 毒



アカヤマドリ 食



ニガクリタケ 毒



コガネタケ 食



ナラタケ 食



クサウラベニタケ 毒



コウタケ 食

佐倉市 坂本文雄

秋咲き里山植物・リンドウの保護活動から気づくこと

1 はじめに

平成29年の秋、生物多様性に配慮した茂原公園の管理を茂原市に提案し、それから紆余曲折あって、同公園における保護活動が8回目の秋を迎えることとなりました。

現在は行政との協働で、同公園内に大小10か所ほどの保護区を設置し、各季節に開花する草本や低木類などの保護活動を行っています。

リンドウは、そのうちの主に3か所で見られます。ただし、秋の半自然草原の環境ですので、早春のカタクリなどのように一面一斉に見られると言うものではありません。

右上写真は、令和4年11月5日、『道表山保護区』（元展望台北側斜面）の一角にたまたまとまって開花した様子です。保全作業中に誤って鎌で刈ってしまったように、目印として農業用のトンネル支柱を設置しましたが、花壇のように先に囲いを設けてそこに植えた訳では、決してありません。

なお、今年の秋は、夏の猛暑と10月に入ってから不安定な天候のせいでしょうか、例年より開花が遅く、天候にもよりますが、まだ数日はかかりそうです（10月28日確認、右写真）。



2 貴重と言うほどのものではないけれど

リンドウと言えば、本来、晩秋の里山環境にあっては、そう珍しくないものだったと思います。しかし、農業や道路管理などのために夏前後に草刈りが行われたり、逆に耕作放棄などにより適正な環境が失われたりして、近頃（？十年）はあまり見られないように感じています。

フリー百科事典サイトによれば、長野県と熊本県が県の花、全国各地の20を超える自治体が市町村の花に指定しているようです。千葉県内では栄町が町の花に指定しており、同町のHPには、『町民のふるさと意識・郷土への愛着心を高めるとともに、町の環境美化やイメージアップを図るため町民と小中学校の児童生徒からの選定により町の花に選ばれました。』とあります。

いずれの自治体でも、リンドウが身近な存在として指定されており、保護活動を実践している身としては、たいへん嬉しく思います。

古典では、某サイトによれば、平安時代の『源氏物語・夕霧』に「草むらの虫のみぞよりどころなげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より竜胆のわれ独りのみ長うはい出でて露けく見ゆる」と、また『枕草子』には「竜胆は枝さしなどむつかしけれど（枝ぶりは良くないが）、異花ども（他の草花）のみな霜枯れたるに、いとはなやかなる色合にしてさし出でたるいとおかし」とあるそうです。いずれも、いかにも晩秋の風景が浮かんできます。



3 保全作業による植生の変化

下写真は、保全活動を始めて1年目の秋の『道表山保護区』（元展望台北側斜面）の様子です。アキノキリンソウの黄色い花が目立っています。参考までに、1年前までは、全てが刈られていました。

一方この数年は、幸いリンドウやキバナアキギリなどが増えましたが、アキノキリンソウがすっかり減ってしまいました。春から秋の長期にわたる保全作業（選択的除草）によって、葉が判別しにくいアキノキリンソウは、気づかないうちに（鎌で）刈ってしまったのかも知れません。秋咲き植物の保護の難しさの理由が、この辺りに潜んでいそうです。

観光施設や、一斉にカタクリが咲くような早春の里山とは違って、秋の里山は様々な植物が少しずつ時期をずらしながら、様々の姿で生育、開花します。アレもコレもみんな残したい。一方、残すものとそうでないものの判別が難しい。トゲが痛い仲間は作業的には支障があるので除去の対象？大きい葉のものやツルは？花後の花殻や実は景観を損なう!?などなど、知っていなければ、また考えなければならぬ要素がたくさんあります。リンドウは、そのような冬前の最後の登板、出演者。より多くの活動仲間の協力を得ようとする、その辺りの理解と周知が欠かせません。

半自然草原の保全に関して検索してみると、色々興味深いサイト、論文が見つかります。関心のある方は、是非調べてみてください。以下はその事例です。

京都大学サイト <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2016-02-16>

半自然草地性絶滅危惧植物の保全に好適な草刈り時期を解明

ー開花結実期の草刈りが繁殖と遺伝的多様性を低下させるー

関連サイト <https://academist-cf.com/journal/?p=1049>

同サイトでは、茂原公園の実践で分ったことと似たような（どこが？）考察をしています。なお、茂原公園では多くの草本が地上活動を終わらせる1月までに、全保護区の草刈りを行っています。

（記：茂原市 望月力智）

